

連文における名詞句のくり返しの形式分類

鯨 井 綾 希

キーワード: くり返し、名詞句、連文、BCCWJ コアデータの「書籍」

要旨

本稿では、文と文のつながりが明白である連続した二つの文(連文)での名詞句のくり返しに注目し、その現れ方を形式と用例数から調査することで、同一語句のくり返しの使用実態の一端を明らかにすることを目的として考察を行った。資料には『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD-ROM)のコアデータに含まれる「書籍」を利用した。分析を通して、名詞句のくり返しのバリエーションの詳細を記述し、その量的な差異も明らかにした。

1. はじめに

文を積み重ねて文章を形作る際には、独立した文と文(連文)の間の意味的な関連性を表すために、先行文で使った語句を後続文でくり返し用いることがある。

(1) カラスとは正反対に、スズメは可愛らしい鳥です。普通の鳥は地面に降りるとトコトコ歩きますが、スズメは両足をそろえてピョンピョン跳ねて移動するので。(中村幸昭(2002)『鳥羽水族館館長のジョーク箱』第三文明社、サンプルID: PB24_00012)

(1)の連文は、先行文で用いた「スズメ」という語を後続文でくり返し用いることで、後続文でも引き続き「スズメ」の話をしているということが明確になっている。このように、個々の文の関連性が示される同一語句のくり返しは単なる文の累積ではない文章という単位を形作る一助となる。

同一語句のくり返しは、早くは市川(1978)や牧野(1980)、永野(1986)で取り上げられ、近年も高崎・新屋・立川(2007)や鯨井(2012)で文章中の語句のくり返しの様相が分析されている。しかし、くり返しに用いられる語句がどのような形式で使われ、形式ごとになどの程度くり返されているのかは詳細に研究されておらず、文章中における同一語句のくり返しの実態記述はまだ十分であるとは言えない。

そこで本稿では、文と文のつながりが明白である連続した文の間での同一語句の

くり返しに注目し、中でも特に用例数の多い名詞句のくり返しを取り上げ、その詳細を調査することで、同一語句のくり返しの使用実態の一端を明らかにしたい。

2. 先行研究

同一語句のくり返しに関する近年の研究として、始めに高崎・新屋・立川(2007)を取り上げる。高崎・新屋・立川(2007)では、『文藝春秋』の随筆を用いて同一語句のくり返し(同書の中では「語句の反復」)の様相が分析され、そこに見られるいくつかのパターンが明らかになった。特に、文章中でのくり返しの出現位置を調査し、文章の冒頭文に含まれる語句が前半でくり返されるパターンが最も多く、次いで題名の語が前半と後半でくり返されるパターンが多いことを指摘した点は、語句のくり返しと文章展開との関係を明らかにする上で重要だと思われる。

続く鯨井(2012)では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の2009年度版モニター公開データに収録されている「書籍」を利用して、名詞のくり返しの量的な様相が分析されている。その結果、文章中では多かれ少なかれ同一名詞のくり返しが見られることが書籍全体において確認され、その量の振れ幅も明らかになった。

ただし、高崎・新屋・立川(2007)も鯨井(2012)も、くり返しの具体的な現れ方のバリエーションに関する記述が少なく、どのような形式の語句がどのくらいの量のくり返しとして現れるのかという点に関する分析が不十分である。

そこで本稿では、同一語句のくり返しの具体的な使用形式を調査し、そのバリエーションと用例数を明らかにすることを目的として考察を行う。ただし、現状ではくり返しとして認定できる語句の種類が非常に多く、その網羅的な記述を一度に行うことは困難であるため、本稿ではくり返しとしての用例数の多い名詞を用いたくり返しに注目し、その使用形式に関する記述を行うことにする。

3. 分析資料と分析方法

3-1. 分析資料

分析資料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD-ROM)(以下BCCWJと記述)に含まれるコアデータの中の「書籍」を選んだ。コアデータはBCCWJのデータ量を約100分の1にする代わりに、個々のデータの語の解析精度を上げているもので、BCCWJの中核とみなせる資料である。また、コアデータの内部には「書籍」の他にも「雑誌」や「新聞」、「白書」、「Yahoo!知恵袋」、「Yahoo!ブログ」が含まれるが、本稿で

は、媒体の性格に比較的偏りが少ないと考えられる「書籍」を分析対象とした(コアデータの詳細は国立国語研究所コーパス開発センター(2011)を参照のこと)。

3-2. 分析方法

文章中での同一語句のくり返しは様々な状況で行われ得るが、本稿では連続した文の間で用いられる名詞のくり返しに注目し、その形式や量を調査した。その際、連文の一方が表題・注釈・図表の題名である場合は連続した文であるとは認めず、分析対象から除外した。それぞれの例を以下の(2)に挙げる。

- (2)a.3 専門家を探す どの業界にも専門家はいるのだが、これもさがすのが難しい。(中村勇人(2004)『SEとして生き抜くワザ』日本能率協会マネジメントセンター、サンプルID:PB40_00003)
- b. *6—『家族の構造』中根千枝著、東京大学出版会。私たちの見た三つの類型は、そうしたインドの家族のそれぞれのプロセスに対応したものだと言うことができる。(山本理顕(2004)『[新編]住居論』平凡社、サンプルID:PB45_00051)
- c. 図8 御殿山看花(『江戸名所図会』卷二)弥生の野遊び さて現在の東京では飛鳥山も御殿山も、屈指の花の名所と呼べるほどのものではなくなり、(長沢利明(2001)『江戸東京歳時記』吉川弘文館、サンプルID:PB13_00080)

(2a)は先行文に表題が、(2b)は先行文に注釈が、(2c)は先行文に図の題名があるため、すべて連続した文とは認めない。

また、くり返しは連続した文の中で複数生じることがあるが、全てを取り出すと分析量が膨大になるため、本稿では連文中に現れるくり返しが複数ある場合、その中で最も文字数の多いもののみを取り出した。

4. 分析

4-1. 同一語句のくり返しの種類と用例数

3節でも述べたように、本稿では連続する文と文の間でくり返されている名詞句を分析対象とした。ただし、「くり返し」と呼べるものには、名詞句以外にも様々なものがある。名詞同様に語自体に実質的な意味を持っている動詞や形容詞、形容動詞も、くり返しとして用いられることがある。しかし、以下の表1に示すように、それらのくり返しは、文章中で使われる量としては決して多いとは言えない。

表1 実質的意味を持つ語句のくり返し

種類	名詞	動詞・形容詞・形容動詞	合計
用例数	1852	384	2236
割合(%)	82.83	17.17	100

(名詞は形式名詞・指示代名詞を除く)

もちろん、これは文章中の語彙のうち名詞の使用量が通常最も多くなることが原因であり、量的に少ないからといって動詞を始めとした述語部分のくり返しに意味がないわけではない。例えば以下の用例は、動詞部分のくり返しが明らかに連文中の意味的関連性を保証している。

(3) わたしをしんじてください。—しんじてくださらなければ、魔法の宝石はあなたがたの手にはありませんよ」(村山早紀(2002)『シェーラひめのほうけん海の王冠』童心社、サンプルID:PB2n_00003)

(3)は、先行文の「(わたしを)しんじてください」という文が発話された後、後続文でそれが達成されない場合の帰結が述べられている。その際、先行文に対して「しんじてくださらなければ」という条件節が後続文の始めて述べられることで、先行文と後続文の関連性が明示される。

(3)の例から考えても、名詞句以外のくり返しの実態記述も重要な意味を持つと言えるが、本稿ではまず量の多い名詞句のくり返しの記述を優先し、動詞を始めとした他の品詞のくり返しに関する調査は今後の課題としたい。

対象を名詞句に絞り、くり返しの形式を整理したところ、以下の表2に示す結果が得られた。

表2 名詞句のくり返しの形式と用例数

形式	名詞単独	修飾部を含む	名詞の一部	合計
用例数	1355	132	365	1852
割合(%)	73.16	7.13	19.71	100

表2の「形式」に見られる「名詞単独」は、以下のような、くり返されている部分が単独の名詞であるものである。

(4) 便箋を閉じたものの、スーツケースにおさめる暇はなく、片手に持ったままプラットホームに降りた。改札を出て階段を下りかけたところで、便箋をバッグにしまおうとして、一瞬足もとから注意がそれた。(高山路爛(2002)『わが愛はやまず』文芸社、サンプルID:PB29_00003)

(4)は名詞の「便箋」がくり返されている。同様に、複合名詞の場合もそれ全体が一語としてくり返されている場合は「名詞単独」に含めた。なお、くり返しに使われた名詞が修飾語として機能していたり、被修飾語であったりする場合もあるが、くり返している部分が単独でありさえすれば、それを全て「名詞単独」とした。また、固有名詞であれば、次のように内部で連体修飾関係や省略があっても、それを「名詞単独」のくり返しとした。

(5)私が代表する会社、SOFIREM (Societe Financiere pour favoriser l'industrialisation=炭坑地域の産業配置転換と経済リストラのための会社)は、産業グループ「フランスの炭坑」の関連会社であります。1967年に「フランスの炭坑」は国と直接協力して我々の組織を設立しました。(経済協力開発機構(著)今井正太(訳)(2004)『OECD加盟国の理念と現状』技術経済研究所、サンプルID:PB43_00060)

(6)将軍にはむろん子ができず、それゆえ候補者の一人は、紀州の徳川慶福、当時八歳、一人は水戸藩主徳川斉昭の七男一橋慶喜、当時一七歳。慶福はわずか八歳の子供だけど、血筋は家定のいとこで一番近い。(池田亮二(2002)『お墓曼荼羅』新風舎、サンプルID:PB22_00002)

次に、連体修飾を受けている名詞が、連体修飾部を含めてくり返されている場合には、それを「修飾部を含む」に分類した。以下の(7)がそれに当たる。

(7)その余波を食い、アメリカの企業はガタガタになって、リストラの嵐が巻き起こり、人材の激しい流動が生じて混乱した。この時、アメリカの企業で高まったのが日本に学ぼうという気運である。(松本孝利(2001)『21世紀に勝ち残るITスピード経営』経済界、サンプルID:PB13_00021)

また、既出の名詞を後続文でその他の名詞と複合させてくり返したり、複合的な名詞の一部を後続文でくり返したりする場合もある。次のようなものである。

(8)抽象的思考能力を鍛えるにあたり、挿し絵などは邪魔以外の何者でもありません。絵などがあれば、抽象的思考が妨げられてしまいます。(戸塚宏(2003)『教育再生』ミリオン出版;大洋図書(発売)、サンプルID:PB33_00032)

(8)は先行文の「抽象的思考能力」の「能力」が後続文で取り除かれ、「抽象的思考」としてくり返されている例である。こうした例を表2の「名詞の一部」に分類した。

なお、上記の三つの分類のうち、「修飾部を含む」と「名詞の一部」については、二つの分類にまたがる場合がある。本稿で分析対象とした範囲では、以下の2例がそれに

当たる。

(9) 臉の闇や目隠しの闇は、個人的な闇であって、自分を取り巻く空間全体が闇になったのではない。自分が光を失ったのであって、自分を取り巻く空間が光を失ったのではない。(中野純(2001)『闇を歩く』アスペクト、サンプルID: PB12_00001)

(10) それを防ぐために、絶対にひびが入らないコンクリートが必要であった。二〇年間ひびの入らないコンクリート技術に挑み続けた。(大見忠弘(2004)『復活!日本の半導体産業』財界研究社、サンプルID: PB45_00024)

(9)では、「自分を取り巻く空間(全体)」という「修飾部を含むくり返し」と、「(自分を取り巻く)空間全体」および「(自分を取り巻く)空間」という「名詞の一部を利用したくり返し」があり、二つの分類のどちらにも当てはまっている。しかし、先行文の「空間全体」を「空間」としてしまっても問題なく、「名詞の一部」のくり返しの部分が実質的にあまり機能していないと考えられたため、それらをひとまず「修飾部を含む」に分類した。(10)は(9)と同様に、先行文の「コンクリート」と後続文の「コンクリート技術」で形態的に全く同一のくり返しが行われているわけではなく、それに加え修飾部も先行文の「ひびが」に対して後続文は「ひびの」と、主格の助詞が異なっているが、本稿ではこれを同一とみなし、「ひびが入らない」という形の修飾が「コンクリート」に係るくり返しとした。

一方、具体的な意味を持たない「こと」「もの」「場合」「ところ」「とき」「中」「間」が主名詞となった場合や、指示対象が同じである指示代名詞のくり返しは分析対象としなかった。形式名詞はくり返されていても実質的な意味はないと考えられるためであり、指示代名詞は指示詞としての文法的な機能という、語彙的なくり返しとは異なった性質があるためである。

その他、先行文と後続文において、漢語名詞とサ変化した漢語動詞でくり返されている場合や、動詞と動詞の連用形名詞でくり返されている場合もあるが、そうした形態変化は同一の品詞でのくり返しと同列にできるかどうか検討が必要なため、本稿では集計の対象外とした。

したがって、本稿では、「名詞単独」「修飾部を含む名詞句」「名詞の一部」という三つの形式の分類に注目し、その用法の詳細を分析したい。

4-2. 名詞単独のくり返し

(1)や(4)の用例のような一つの名詞を利用したくり返しは、くり返しの中でも構造的に最も単純であり、連文中において意味的関連性を捉えるのも容易なものであると言える。表2から、ここに分類されるくり返しが最も多いことが分かる。

ただし、先述したように、くり返し部分そのものは単独の名詞であっても、そのくり返しは必ずしも独立した名詞句として使われているとは限らず、より大きな名詞句の中の一部として使われていることがある。調査の結果、名詞単独のくり返しの内実として次のようなバリエーションが見られた。

(11)a. 連体修飾を伴わない名詞句のくり返し

b. 連体修飾を伴う名詞句内の一部を用いたくり返し

b - 1. 先行文の主名詞を後続文の主名詞としてくり返し

b - 2. 先行文の連体修飾内の名詞を後続文の連体修飾内の名詞としてくり返す

b - 3. 先行文の単独名詞・被修飾の主名詞を後続文の連体修飾内の名詞としてくり返す

b - 4. 先行文の連体修飾内の名詞を後続文の単独名詞・被修飾の主名詞としてくり返す

連体修飾を伴わない名詞句のくり返しの例は(1)や(4)が挙げられる。連体修飾を伴う名詞句を用いたくり返しである(11b)の各用例は次のようになる。

(12)タイユヴァンなどへ行くと、やはり昔流の料理を作っているが、びっくりするくらい研究している。でもこれは新しいのではなくて、昔あった料理をいかに軽く作ろうかとする。(辻静雄(2004)『辻静雄コレクション』筑摩書房、サンプルID: PB45_00077)

(13)子どもの主な発言を記述してみよう。そこに子どもの思考の変容過程を見ることができる。(森本信也(編著)(2003)『子どもの感性がつくる理科授業』東洋館出版社、サンプルID: PB33_00037)

(14)十カ所以上の火口から、溶岩がふきだしたのだ。流れ出た溶岩の跡が、幅百メートル、長さ三キロメートルもの大きさで、今も残っている。(NHK「プロジェクトX」制作班(編)(2001)『命を救え!愛と友情のドラマ』汐文社、サンプルID: PB1n_00024)

(15)こうした鉄道工事のニュースは、新聞でも知ることができたが、学校に通って

いれば、もっとこまかい情報をいち早く手に入れることができた。教官や講師のなかには、鉄道工事にたずさわっていたことがある人もいたし、訪れる人には鉄道関係者も多かったからである。(志茂田景樹(作)早瀬賢(絵)(2001)『あご伯父の川』KIBABOOK、サンプルID:PB1n_00066)

(12)は(11b—1)の例である。「昔流の」「昔あった」という異なる修飾部を持った主名詞「料理」のくり返しが見られる。(13)は(11b—2)の例である。「子ども」という名詞が「発言」と「思考」という主名詞を修飾する形でくり返し用いられている。(14)は(11b—3)の例である。先行文では「溶岩」という名詞が単独(主名詞)で用いられ、それが後続文で「跡」の修飾部としてくり返し用いられている。(15)は(11b—4)の例である。先行文で「ニュース」を修飾する語として「鉄道工事」が用いられるが、後続文では単独の名詞(主名詞)として「鉄道工事」がくり返されている。

それぞれの用例数は次の表3のようにになる。

表3 名詞単独のくり返しの形式と用例数

形式	連体修飾を伴わない名詞句 a	連体修飾を伴う名詞句内の一部				合計
		どちらも主名詞		どちらか主名詞		
		b-1	b-2	b-3	b-4	
用例数	513	402	100	171	169	1355
割合(%)	37.86	29.67	7.38	12.62	12.47	100

表3によると、先行文と後続文でくり返し用いられた語がどちらも単独の名詞である割合と、修飾部を伴いつつどちらも主名詞である割合が、合わせて67.53%と全体に対して多くを占める。反面、先行文と後続文のどちらも修飾語の一部であるくり返しは7.38%と少ない。このことから、連文中でくり返しとして用いる名詞は、それぞれの文で主たる語として使われたものが選ばれる傾向にあると言える。

一方、先行文と後続文の一方で修飾語の一部、もう一方で被修飾の主名詞ないしは単独の名詞として使われたくり返しを見てみると、先行文が主名詞や単独名詞である場合(b—3)が12.62%、後続文が主名詞や単独名詞である場合(b—4)が12.47%と、ほぼ同割合であった。b—3は、先行文の語を既に述べた語として後続文の新規の語の従属的な位置づけに変更するくり返しであると言え、b—4は、先行文の語を後続文において焦点化するくり返しであると言える。両者の用例数が同程度であったことから、くり返された語の情報価値の変化は、一定の傾向がないと考えられる。

以上の点から分かる連文中のくり返しの特徴を、以下のようにまとめておく。

(16)a. 名詞単独のくり返しは、連文中で主名詞相当である傾向にある。

- b. 名詞単独のくり返しは、くり返された名詞句の情報価値の変動に関して一定の傾向があるわけではない。

4-3. 修飾部を含む名詞句全体のくり返し

一つの名詞がくり返しに利用された4-2節に対して、連体修飾部を含めた名詞句全体がくり返されていることがある。(7)のように「AのB」という単純な名詞句がくり返されている場合もあるが、連体修飾部を含めてくり返される場合もある。

(17) その結果、学問に基づいた本物の技術しか通用しないということがいろいろな産業分野でいま始まっている。これは何を意味するかというと、ある一つの産業分野は必ず一社独占化の道を進む、つまり学問に基づいた本物の技術を作った企業(多くの場合、得意技術の異なる複数の連合体)が勝つということである。(大見忠弘(2004)『復活!日本の半導体産業』財界研究社、サンプルID: PB45_00024)

(18) 私が作ろうとする小学校では、このような体験的にしか学び得ない人間性の成長を重視します。ここまで書けばおわかりだと思いますが、私が作ろうとする小学校というのは、先に説明した「脳幹トレーニング」を教育の中で活用しているという試みです。(戸塚宏(2003)『教育再生』ミリオン出版;大洋図書(発売)、サンプルID:PB33_00032)

(17)は「本物の技術」という名詞句を「学問に基づいた」という節が修飾し、それによってできた名詞句がくり返しとして用いられている。(18)は「私が作ろうとする」という修飾節が「小学校」に係り、名詞句全体がくり返されている。

修飾部を含む名詞句全体のくり返しは、その修飾の仕方に応じて、以下の表4に示すようなバリエーションに分かれる。表4中では、それらの用例数も示す。

表4 修飾部を含む名詞句全体のくり返しの形式と用例数

形式	名詞の修飾	動詞・形容詞・形容動詞の修飾	項+動詞の修飾	合計
用例数	103	23	6	132
割合(%)	78.03	17.42	4.55	100

表4のうち、「名詞の修飾」は「AのB」という形を基本とするが、白川(監)(2001)で「名詞型引用表現」とされる「AというB」の形式も、「いう」に実質的な意味が不足していると考え、「AのB」と同様に「名詞の修飾」に入れた。

(19) 全滅したことによって、イスラエルという国は、自治区としてもなくなり、

完全に地図の上から消えるわけです。「ディアスポラ」と言いますが、その時点でユダヤ人はイスラエルという国を失って、世界に離散していきます。(井沢元彦(2004)『ユダヤ・キリスト・イスラム集中講座』徳間書店、サンプルID: PB41_00175)

(19)の下線部は「イスラエル」に主眼が置かれ「国(として)のイスラエル」という形に言い換え得る。したがって、(19)は「名詞の修飾」として分類した。

表4を見ると、「名詞の修飾」が用例数全体の80%近くを占め、修飾部を含む名詞句全体のくり返しとしては、最もよく使われるものであると言える。

「動詞・形容詞・形容動詞の修飾」は、くり返し部分に述語相当の語が取り得る項を含まない例であり、以下のようなものがある。

(20)この本は「ロクな準備もせずに手軽に闇体験する」というのをモットーにしているので、思い立ったその日にすぐできる、というのがすごく重要だ。闇飲みにしても闇風呂にしても、自分の家で手軽に、思い立ったその日にできる。(中野純(2001)『闇を歩く』アスペクト、サンプルID:PB12_00001)

(21)むしろ、小さな組織で自己責任を体感することで金銭感覚が鍛えられ、無駄な出費を抑えることや、個人年金や投資による自己防衛策を練るテクニックが身につく。こうして見ると、小さな組織は時代に即した形ともいえるだろう。(中森勇人(2005)『関西商魂』ソフトバンクパブリッシング、サンプルID:PB56_00007)

(20)は「思い立つ」という動詞が「その日」に係り、それ全体が名詞句としてくり返されている。(21)は「小さい」という形容詞が「組織」に係り、それ全体が名詞句としてくり返されている。量的には、22例のうち半分の11例が形容詞であり、動詞は6例と形容詞に比べれば少ない。

「項+動詞の修飾」は、既に(17)と(18)で挙げている。(9)や(10)の用例もこの分類に含まれる。この分類は用例数が6例と少なく、その傾向を検討するのも慎重であるべきだが、その6例を見ると、動詞に付与される項がどれも1つであるという特徴が見出せる。(17)であれば「学問に一基づく」、(18)であれば「私が一作る」、(9)であれば「自分を一取り巻く」、(10)であれば「ひびが(の)一入る」という形である。つまり、項を含めた用言による連体修飾を行った名詞句は、その全てをくり返す場合、付属する項を増やさない傾向がある可能性を指摘できる。

本節の考察から分かったくり返しの特徴を、以下のようにまとめておく。

(22)a. 修飾部を含む名詞句全体のくり返しは、「AのB」という名詞同士の修飾・被修

飾の形が最も多い。

- b. 項を伴わない動詞・形容詞・形容動詞を修飾部に持つ名詞句は、その半分以上が形容詞を修飾部に持つ名詞句である。
- c. 項を従えた動詞を修飾部に持つ名詞句全体のくり返しは、修飾部の動詞が従える項の数が1つであり、2つ以上の項を伴うくり返しは見られない。

4-4. 名詞の一部によるくり返し

4-2節と4-3節で対象としたくり返しは、主なくくり返し部分が一つの語を形作った名詞であり、その形式の記述はどちらも修飾・被修飾という統語的な関係に重点が置かれてきた。それに対し、一つの名詞の内部を切り離したり、名詞と名詞を組み合わせたりすることで、先行文と後続文で同一語ではないものの、部分的に一致した名詞をくり返す例も見られる。そのくり返し方は以下の三つに分かれる。

- (23)a. 先行文の複合的な名詞の一部を後続文で単独の名詞としてくり返す
 - b. 先行文の単独の名詞を後続文で複合的な名詞の一部としてくり返す
 - c. 先行文の複合的な名詞の一部を後続文の複合的な名詞の一部としてくり返す
- それぞれの用例は以下のようになる。

(24) 我々フランスの柔道家のとるべき態度は要約すれば次のように言うことができるだろう。柔道はスポーツだが、それはまたスポーツ以上のもので道徳的な潔癖さ、沈着冷静さ、心の均衡を備えた一つの生き方にならなければいけない。(吉田郁子(2004)『世界にかけた七色の帯』駿河台出版社、サンプルID:PB47_00014)

(25) 恋愛成就なら別に有名な神社もあるだろうに、タクシーの運転手が言っていたように、最近は受験のお願いにくるのが流行っているのだろうか。この二人ももしかして受験生なのかもしれない。(小松左京・高橋桐矢(2002)『安倍晴明』二見書房、サンプルID:PB29_00026)

(26) 人間同士の関係は、さすがに価格破壊をもってしても崩せない。インターネット証券が低価格で攻めてきても、人間で防波堤を築いて応戦する。(松本孝利(2001)『21世紀に勝ち残るITスピード経営』経済界、サンプルID:PB13_00021)

(24)は(23a)の例である。先行文で「柔道家」という語が使われた後、後続文で「家」を除いた「柔道」という語が使われ、連文の関連性を示している。(25)は(23b)の例である。先行文の「受験」という語と関連して、「生」が付いた「受験生」という語が後続文で使われている。(26)は(23c)の例である。先行文の「価格破壊」という語と関連し、後

続文で「低価格」という語が用いられている。これらはいずれも名詞の一部を利用したくり返しであると言える。

これら三つのバリエーションの用例数については、名詞の一部を別の名詞の一部としてくり返し用いるという(23c)の用例数がその他の二つに比べやや少ないものの、大きな差は見られなかった((23a)が134例、(23b)が123例、(23c)が108例)。したがって、名詞の一部を用いたくり返しは、その使われ方の分類に大きな偏りはなく、状況に応じて任意に組み合わせを変えられると考えられる。

5. おわりに

本稿では、文と文のつながりが明白である連続した二つの文(連文)での名詞句のくり返しに注目し、その現れ方と用例数を調査することで、同一語句のくり返しの使用実態の一端を明らかにすることを目的として考察を行った。分析を通して、特に連体修飾の有無や変化から見た名詞のくり返しのバリエーションを詳細に記述し、その量的差異も明らかにした。

今後の課題としては、名詞に限らず、動詞や形容詞などを利用したくり返しの様相を整理することがまず挙げられる。名詞もまた名詞文として述語の機能を担ったときに、どのような形でくり返しが行われるのかという点を検討する必要がある。その他、テンスやアスペクトに関わる助動詞は、状況次第で物語の進行のあり方に大きく関わることもあるため、そのくり返しの様相も分析対象となり得るだろう。

参考文献

- 市川 孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版。
 鯨井綾希(2012)「文章中における名詞の反復の量的様相—Type - Token Ratioを利用した分析—」『計量国語学』28. 6, pp. 211 - 225。
 国立国語研究所コーパス開発センター(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き第1.0版(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD-ROMに所収)。
 白川博之(監)庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(著)(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
 高崎みどり・新屋映子・立川和美(2007)『日本語随筆テキストの諸相』ひつじ書房。
 永野 賢(1986)『文章論総説』朝倉書店。
 牧野成一(1980)『くりかえしの文法一日・英語比較対照—』大修館書店。

資料

- 国立国語研究所コーパス開発センター(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD-ROM)。